

「助けてください」

やつれた顔の女は、暗い声でそう言った。

探偵事務所の中だ。

「お客様にお茶を」

言ったのは、ソファーに深く腰掛けた香織だ。そしていそいそとお茶を運んできたのは日下部だった。いつの間にか事務所の扉に掲げられた看板には『香織探偵事務所』と書かれてある。

かつての所長日下部は、「私には三つの僕が必要な。でも今はまだ一つの僕しか決まっていないから、あなたを名誉ある二番目の僕にしてあげてもよくなってよ」と香織に言われ、どことなくありがたく思っ感謝までしつつ、香織の言葉に従って僕となつてしまったのである。あまりのことに、二人いた探偵は会社を辞めてしまったのだった。「で、私に何をしたいの」

客の応対をしているとは思えない横柄な態度で香織は言った。

「この男から守って欲しいのです」

女は一枚の写真を出した。

どうやら卒業アルバムからコピーしたものらしいそれには、生真面目な顔で正面を向いている、太った男の顔が映っていた。カメラから目を逸らせている。それが、何かうしろめたいモノを感じさせる。深夜に街を歩いていたら、必ず職務質問を受けるタイプの顔だ。

「この男が何を」

「ずっとこの男につけ回されているんですよ」

いかにも薄幸そうなの女は、木綿のハンカチでそっと目を拭って付け加えた。

「ストーカーなんです」

なるほど、と香織は大きく頷くと、テーブルを挟んだ女の方へと顔を突き出した。

今この瞬間に、彼女はこの仕事に興味を持ったようだ。それは依頼者の女にもよくわかった。

「もしかして、あなたもかつてストーカー被害にお遭いになったことがあるのか」

「まあ、そうね」

香織にしては珍しく、曖昧に頷いた。

「そうですね」

女が初めて微笑んだ。

「良かった。ただひたすら監視されているあの恐ろしさを理解してくださる人は、男性はもちらん、女性にもなかなかいないんですよ」

女は香織がストーカー被害者であると勝手に思ったようだが、本当は加害者の方である。つきあった、あるいはつきあってもいない男性を相手に、香織は繰り返しストーカー行為を働いていた。その中には裁判沙汰になったものもあったが、豊富な財力でなんとか示談で済ませてきた。しかし香織に、迷惑をかけたつもりなど微塵もない。愛にモラルはない、が香織の主張なのだ。

ついでにそのストーカーのテクニックが探偵業でいろいろと活かされてもいることに、誇りすら持っていた。

というわけで、彼女が共感を持っているのは被害者の彼女ではなく、加害者の方な

のだが、あえて今それを相手に告げる気はない。

「それじゃあ、少し詳しくお話し願えますか」  
女に促した。

彼女の名前は小杉竜子。銀行勤めのし、二十二歳、独身だ。相手の男は彼女の直接の上司、西田善治、四十三歳。妻子持ちだ。

最初は社内でのセクハラから始まった。何かといえば身体を触る。彼氏がいるのか執拗に尋ね、えげつない下ネタをする。そして気の弱い彼女がろくに反撃できないのを知ると、それはどんどんエスカレートしていった。

結局食事に誘われ、どうしても断り切れずについて行ってレイプされた。西田はそれを合意の上だと本気で思っていた。だから彼女が意を決し警察に相談して、どうやら本気で避けようとしていると知ったとき、それは耐えられない裏切りに思えたのだらう。そして彼女の家に毎夜電話がかかってくるようになった。どうやら話の内容から考えると、二十四時間どこにいても監視されているようなのだ。

髪の毛や、汚された下着といった薄気味の悪いプレゼントが宅配便で届けられ、いよいよ我慢できなくなつてここに相談に来た。

「もちろん警察には伝えてはいるんですが、あまり親身になつてはくれませんでした。やはり私が刺されるとかして襲われないと、真剣には動いてくれないみたいです。でもそれじゃあ、殺されちゃう！」

喋るうちに興奮し、最後は悲鳴に変わった。竜子が落ち着くのを待つてから、香織は言った。

「で、西田はまだ会社にいるのね」

「ええ、会社員としてはなんの落ち度もない人間なんです。あんなに異常者なのに」「一番厄介なタイプよね。日常生活は普通に送れるし、自分が何をしているかはわかってる。ただ罪悪感がないだけ。ということは、あなたが会社に行くかどうかしても西田と会うことになるのね」

「はい、それももう耐えらそうにはないです」

「直接苦情を言ったことはありませんか」

「いいえ。だって証拠がありませんから。ああ、一度西田の上司に相談したことがあるんですが、注意しておくだけ言って終わりでした。会社にとっては〇し一人よりもあの男の方が値打ちがあるのだなと……」

「それで私のところに」

「そうです。会社を辞めようと何度も思ったのですけど、それでなにもかも解決するとは思えなかったんです。そうしてもきつと、よけいにつけあがって私につきまとうんじゃないかって。そんな人なんです」

「で、何をお望み？」

「あいつが犯人だという証拠を掴んで欲しいのです」

「証拠を掴む……それだけでいいの」「えっ？」

「それだけで、すべてが終わると思ってるのかしら」

「確かな証拠があれば、さすがに会社も黙っていないでしょうし、いざとなれば裁判で戦うことだって出来るだらうし……」

ずっと香織の冷たい視線に晒され、竜子の声はどんどん小さくなっていった。

とうとう黙りこんでしまった竜子を見ながら、香織は誰に言うともなく呟いた。

「復讐こそがゴシックの華。ゴスといえば復讐劇なのよ」

「あの……なんのことでしょうか」

「たどえその男がストーカーである証拠を掴んだとしても、そしてそのことを会社の上司に伝えたとしても、会社はあなたのことを、ややこしいクレーマー体質の女だと思うだけのこと。結局は上司に嫌がらせをされ、会社を辞めなければならなくなるのはあなたの方。もし仮に裁判に持ち込んだとしても、長い裁判に疲れ切って、挙げ句の果てに手に入れるのはわずかばかりの示談金。それで良いのね？」

「いや、それは……」とまた口ごもる。

「それが嫌なら、あなたのすべきことはたった一つ、復讐よ」

「復讐って……でも、それは」

「その馬鹿が、泣いてあなたに土下座すれば、そうすればようやくあなたの気も晴れる。それに一度負けた犬は二度と吼えないわ。そのためにも徹底して復讐すべきなのよ」

「しかし、復讐しろと言われても、どうしていいのかわからないです」

「大丈夫、香織探偵事務所が全面的に復讐をバックアップしますよ」

その時には既に、もう何十通りもの復讐プランが香織の頭の中に浮かんでいたのだ。

2

瞬く間に三つの盗聴器と、隠しカメラを一つ発見した。ワンルームマンションのこぢんまりした部屋には多すぎる。すべてが無線で外部へと繋がっていたので、香織は無線妨害をしてから説明を始めた。

「おそらく外出中には望遠カメラと集音マイクであなたの行動を観察していたでしょうね。西田の電話番号はわかっているの？」

「ええ、ケイタイも自宅の電話も」

「それは着信拒否してますね」

「それは、その、会社の上司ですから、仕事の話だと言ってかかってくるので……」

「そんなことをしているから舐められるのよ。着信拒否にしておきなさい」

「はい」

「着信を拒否されていることに気づいたら、すぐに公衆電話からかけてくると思うので、それも着信拒否するようにしておきなさい」

「でもそうすると、すべての公衆電話からの着信を拒否することになってしまいます」

「そこに何か不都合でも」

凍り付くような冷たい視線で竜子を見た。竜子は目を伏せ、いいえ、と首を横に振った。

「今日一日で充分すぎる収穫があったわ。盗聴器のうち二つが電池式だったから、きつと西田は最近もこの部屋にも入り込んでいるはずよ。まさか合鍵をつくらせたとかはしないでしょね」

「それはありません。だからどうやって入ったのか不思議で」

「会社のロッカーから鍵を盗んで、複製をつくって返しておけばいい。簡単なことよ。不法侵入しているその証拠は、しっかりと押さえておかなければ駄目ね」

香織は監視カメラを仕掛けた。玄関と、室内の盗聴器が仕掛けられていた場所を監視出来る位置の二カ所にだ。

「二十四時間ずっと監視を続けるわ。カメラはHDレコーダーに接続されていて、画質を落とせば二日間連続録画が可能よ。カメラの無線部品をちょっと壊しておいたから、いずれ様子をここに侵入してくるでしょう。その時には、顔がはっきりと

映った犯行現場の動画が手に入るわ。これであなたの家にかんしての証拠集めは終わり。次はいよいよ復讐を開始することにしましょう。覚悟は良くて」

竜子は生唾を飲んで頷いた。緊張しすぎて身体が強張っている。そのまま拗ねた子供のように脚を突っ張らせ、香織に手を引かれ家を出た。そこに待ち構えていた黒塗りの車に、半ば拉致するように乗せられる。連れて行かれた先は、数年前から捨て置かれている大きな屋敷だった。

鍵を使って玄関扉を開き、勝手にどんだん中に入って行くので、竜子が不審そうな顔を見せたのだろう。お父様の持ち物なの、と香織は竜子に説明した。

土足で玄関から上がり込む。まっすぐに向かったのはキッチンだった。

香織は部屋の隅に置かれていた物を手にした。

「これ、これ」

顔の前にそれを突きつけられ、竜子は小さな悲鳴を上げた。

それはネズミ取りに捕まったネズミだった。針金で出来た小さな檻の中にいるのは、さらに小さなイエズミだ。

ネズミ取りは全部で五つ仕掛けられており、そのすべてに一匹ずつネズミが入っていた。すべて昨夜の内に宏重が仕掛けておいたものだ。

「そんなものをどうするんですか」

車に乗り込んでから竜子はそういった。

「復讐の素をつくるのよ」

香織はそう答えて不敵に笑った。

捨て置かれた屋敷を出て三十分。車は小さな町工場ばかりが並んでいる、埃っぽい町にやってきた。寂れたその町の、一つのシャッターの前で車は停まった。閉じたシャッターには大きく『カオリ・ラボ』と書かれてあった。

「私専用の研究室よ」

香織は恋人でも紹介するように楽しくそう言うと、シャッターを開いて竜子を招き入れた。何の薬品なんだろうか。刺激臭がする。一瞬でシックハウス症候群に陥りそうな臭いだが、香織は慣れているのか、まったく平気だ。滝田はハンカチで鼻と口を押さえた。

「ここは何なんですか」

「だから言ったでしょ。私の研究所よ」

ロッカーを開いて白衣を取り出すと、上から羽織った。

「ゴシックにはマッドサイエンティストがよく似合うとロジエ・カイヨワも言っているわ」

「そ、そうなんですか」

「素直すぎー！」

怒鳴られ、びくりと竜子は飛び上がった。

「それはそれとして、人知れず進められている怪しげな研究。科学の暗部。それこそがゴスなのよ。そしてついでに白衣の魅力もあるし。でね、今回はこれを使おうと思っただけ」

スチールのテーブルに大きなガラス製の水槽が置かれてある。小学生なら余裕で横たわれそうな水槽に、水は入っていない。底に敷きつめられているのはおが屑だろうか。その上には金網が置かれてあった。上は布製の蓋で塞がれている。

「これは何ですか」

「繁殖用のケースよ。底に敷いてあるのは、おが屑とフスマと大豆の粉、乾燥卵その他いろいろを混ぜたやつ」

水槽全体を照らせる大きなライトに、明かりが灯された。水槽の中が一様に白く

照らされた。しかし中に何かが入っているようには見えない。

「空ですよね」

「そう見える？」

「見えるというか、実際何もいないじゃないですか」

「そろそろいいかな」

水槽の中を見ながら、香織はネズミの入ったかごを取りだした。軍手をしてから、一匹を取り出す。ネズミはきいきいと声をあげ身をよじった。

「ネズミをここで飼うんですか」

「違うわ。ネズミは餌よ」

「ネズミが餌……。それじゃあ、蛇とかワニとかを飼うんですか」

「まあ、これを見たらわかるわ」

蓋を外し、中にネズミを投げ入れた。

「これで、どうなる……」

竜子が言い終わる前に、それが目の前で始まった。

ネズミは狂ったように暴れている。その身体がどこか煙ったように霞んでいる。良く見ると、黒い砂粒のような物がネズミに降りかかっている。意思を持った砂粒が、ネズミの全身を覆っていた。

「こ、これは……」

「ノミよ」

香織は楽しそうに言った。

竜子の腕に一斉に鳥肌が立った。うっ、と呑んだ息を吐き出せない。黙り込んだ竜子の様子を充分観察してから、香織は言った。

「最初はこうしてネズミを捕まえてきて、ここに入れておくの。そうすると吸血した雌のノミが、このおが屑の中に産卵するわけ。一日で数十個の卵を産んで、それが一カ月ほどで成虫になるの。難しいのは湿度と温度を一定に保つことね。湿度は三十分ぐらい、湿度は八十パーセントを保たなければならぬのよ。環境さえ整えたら、爆発的な速度で繁殖していくわ。こんなふうだね」

跳ねる砂粒に埋まったネズミは、もうあまり動こうとはしない。大儀そうに尾がぱたりぱたりとおが屑を打っていた。

「これをどうするつもりなんですか」

「西田の家にはうまく決まってるじゃないの」

「……」

「大丈夫。ペスト菌を植え付けたりはしてないから。それだけじゃないわよ。まず西田のプロフィールを使ってブログを立ち上げてあるわ。内容は不倫日記。一応匿名だけれど、ちよっと調べれば西田の職場や住所に行き着くようになってるの。あっちこっちで宣伝したから、そろそろ評判になってきているみたいよ。会社に知れるのも時間の問題でしょうね。後は庭に漂白剤撒いて植木を枯らしたり、勝手に離婚届を出したり、嫌がらせの基本の無言電話も続けてるし、ピザとか寿司とかの大量注文に、通販で家具を買ったりして、もちろんキャッシュカードの暗証番号も抜き出してるから、お金はそこからほとんど引き出されているわ。一つ一つは小さなことだけど、こういう地道な努力がやがて実を結ぶのよ」

「あの、失礼ですけど、それって犯罪じゃあ……」

「大丈夫よ。あなたが関係していることは決してばれない。それで、配達してきたピザ屋とのやりとりとか、無言電話にあたふたする様子とかは、すべて監視カメラや

盗聴器で記録しているから、これも後で送ってあげるね。心配しないで。きっちり追い込んでやるから。ああ、別に西田が自殺してもかまわないわよね」  
「えっ、それはちょっと、あの、家族もいることですし、いくらなんでも……」  
「家族がいるからいいんじゃない。不幸は幸福な家庭から始まるのよ。始まったことはもう途中で止めることは難しいわ」  
「そう言うのと、ぐいと竜子の顔に顔を近づけて言った。  
「まさか裏切ったりはしないわよね。そんなことしたらあなたがどんな目にあうか、あなたに手渡す映像を見てもらったら良く理解してもらえはらずよ。取りあえずはこれ」  
香織は竜子にDVDディスクを手渡した。  
「西田の家で序章として庭先で死んだ鳩を見るところから始まる嫌がらせの数々を見てちょうだい。どこまでひどい目にあうか、楽しみでしょ」  
「竜子は無言で頷いた。  
「楽しくないとは言えなかった。  
「取りあえずひと月で家族をバラバラにして見せますわ」  
それを聞いて竜子は陰惨な笑みを浮かべた。

3

「お嬢さま、小杉竜子様が面談を求めておられますが」  
宏重は部屋に入ってくるとそう言った。へ香織探偵事務所にて午後三時。香織は昼のお茶を飲んでいたところだった。  
「お通しして頂戴」  
「言うと扉が開かれ、背を丸めた暗い顔の竜子が入ってきた。  
「ご無沙汰しております」  
「そう言うって頭を下げる。」  
「最後のディスクは受け取っていただけましたか」  
「香織は商業的な笑みを浮かべて言った。  
「ええ、拝見させていただきました」  
「最後はどうですか。電車への飛び込みは、ある意味陳腐かもしれませんが、それでもラストを締めるための華やかさがありますからね。いかがですか、満足していただけますかしら」  
香織の問いに、竜子は笑みを浮かべて頷いた。  
「それで今日はなんのご用ですか」  
「事件が解決したお礼にと思ひまして」  
「料金をいただいたのお仕事ですから、気を遣って頂かなくても結構よ」  
「返事は素っ気ない。  
「そうおっしゃらずに」  
綺麗な包装紙で包まれ、リボンで飾られた箱を、竜子は目の前のテーブルに置いた。  
「出来の良いドクロ水晶が手に入ったので、このようなものが好きではないかと思ひまして」  
「あらそう。ありがとう。日下部、日下部！」  
香織は扉の外へ向けて呼びかけた。しかし返事はない。  
「おかしいわね……」

香織は俯き、テーブルの上を見るとはなしに見た。

「私が来たときにはこの方しかおられませんでしたけど」

竜子は後ろで立っている宏重を見た。

「そうですね。それもおかしな話ですよ。日下部は私の第二の僕（しもべ）。受付でいるように命じたら、親が死んでも自分が死んでも、その場でじっとしているはずなんですが」

「でも私が来たときに、そこには」

「いなかったんですね」

香織は竜子を見つめた。

俯き加減の竜子は、上目遣いで香織を見返す。

「仕方ないわね。日下部にやってもらおうと思ったけれど、それじゃああなたにやって頂（こう）かしら」

「何をですか」

「その箱を開けてもらえますか？」

「箱を？ それは簡単ですけれど、でもどうして」

「このような商売をしておりますとね、あらゆることに慎重になりますのよ。頂き物や届け物を、無造作に開けたりはしませんの。危険ですから。だから日下部に開けてもらおうと思ったのですが、それが無理ならあなたに開けていただ（こう）かと思（て）」

「私があなたに危害を加えるとも思（て）らっしやるのですか」

「許してくださいね。私は万物を平等に疑（う）うことしておりますの」

「わかりました。それじゃあ」

竜子は箱を手にした。

そしていきなり香織の顔へと投げた。

香織は頭をわずかに右へ避け、同時に右掌で箱を弾き飛ばした。

箱は左の壁に当たり、ぐしゃりと潰れた。

中から何かが噴霧される。

特徴的な甘酸っぱい臭いがした。

「ピロ、窓を開けて！」

香織が叫んだ。宏重は慌てることなく窓を開いた。

「青酸ガスね」

皆川一族の末裔である香織は、あらゆる薬物に精通しているのである。

一歩後ろに下がった竜子は、ハンカチで顔を覆いながら言った。

「なぜわかった」

「言ったでしょ。私は万物を疑（て）っているのよ。世界への懷疑はゴスの基本だわ」

「くそ」

竜子は頬の下に指を引っかけ、ばりばりと皮膚を剥がし始めた。

シリコン製の仮面の下から現れたのは、なんとあのキクタムラジロウではないか。

「もはやこれまで」

言うと同時に、巨大なサバイバルナイフを取り出した。

その時香織は、背後に置かれていた大きな水槽を素手で叩き割った。

下に敷かれていたおが屑が舞った。

キクタはそれが何なのかを知らなかった。だから逃げようとはしなかった。

「行け、吸血の使徒たちよ！」

黒い埃のようなものが、一斉に跳ねた。

ノミの群れだ。

そしてそれは驚くべきことに、香織の命じるままにキクタを目指し跳ねて行くではないか。

真つ黒になるまでノミにたかられたキクタが、絨毯の上を駆け回った。

「痒みに死ねね！」

吐き捨てるように香織は言った。

「これぞ皆川家に伝わる秘薬へ蟲傀儡。それを飲んだものを吸血昆虫は決して襲わない。そして命じるがままに敵を襲う。何よりも吸血とゴスは相性が良いのよ」

「お嬢さま、ご無事ですか」

宏重が近づこうとすると、

「よるな！」

びしりと香織が制した。

声に物理的な力があつたかのように、びたりと宏重は立ち止まった。

「お嬢さま、どうして……」

「日下部はどうしたの」

「煙草を買いにでいきましたが……」

困惑した顔で宏重は言った。

「嘘よ。私にそこにいると命じられて、煙草を買いに行くなど、地球の自転が気まぐれに向きを変えるほど有り得ない。そして」

香織は宏重を指差した。

「そんな日下部のことを一番理解しているはずのピロが、当たり前のことのように煙草を買いに出掛けたとは言わない」

「なるほど」

宏重は言った。途端に、その実直そうな顔に邪悪な笑みが広がる。

「ふふ、ふふ、ふふ、ふふ」

笑いながら、かつて宏重であった誰かは、顔の皮をばりばりと剥ぎ取っていく。

そして白髪の殺人鬼が顔を出した。

そう、それは村田喜久次郎であった。

「ああ、駄目駄目」

香織が吐き捨てるように言った。

「何が駄目なんだ」

村田の目に、不安な色が加わった。

「あなたは変装の意味を理解していかないわ。キクタはまだ女から男へという、変装の根本理念『異装愛』に乗っ取った美学に基づいているけれど、あなたは何」

「な、何が言いたい」

「初老の男から初老の男への変身って、いったい何を考えているのよ！」

怒鳴られ、喜久次郎は身を竦ませた。

「センスがないのにもほどがあるわよ。『芋虫が変身したらナメクジ』みたいなものよ。驚きようもなければ、美しさもない。駄目駄目、全く駄目。所詮おまえのゴスは付け焼き刃。偽ゴスにしか過ぎないのよ」

「う、うるさい！ 黙れ黙れ！」

喜久次郎は背に手を回し、日本刀を抜いた。

「何を言おうと、おまえに仲間はない。誰も助けにはこぬぞ。何故かわかるか。日下部も宏重も、外で骸となっておるのだから。わはははは」

「おまえは時代劇の悪役か。ゴスを名乗るのは百年早いわ。で、どうやって殺したの」



「どうやって……やっぱり、あの、刀でこう、ずばって」

「美意識皆無！ どれだけ必要に迫られ時間のない殺人でも、そこにある種の美学がなければただの俗物殺人。パチンコ店に入っている間に子供を車に放置して殺してしまう母親程度の安っぽい犯罪にしかならないのよ。所詮はやりたい一心で女を口説くことに精力を注いでいた似非作家のなれの果て。その貧相な俗物精神には反吐が出るわね」

「うるさいうるさいうるさい」

言いながら、喜久次郎は両手の人差し指を両耳の穴に出し入れした。

「聞こえない聞こえない聞こえないわあああああああ」

最後は叫びながら、抜きはなった日本刀を大上段に振りかぶって香織へと走り寄ってきた。

香織はポケットから紙包みを取りだし、中身を口に含んだ。

喜久次郎は無防備な香織の頭へと刀を振り下ろした。

「ば、ばかな」

喜久次郎が全力で振り落とした刀を、香織は親指と人差し指で挟んで止めた。

「秘薬へ狂いもののふ」。一粒呑めば超人的な戦闘能力が身に付く薬よ」

「それはあまりにも都合主義」

「それが俗人の考えだというのよ。これはご都合主義ではなく運命。ゴスの神の見えざる手の御業なのよ。さあ、覚悟はいいわね。いくわよ」

それからの香織の攻撃を細かく描写することは倫理的に憚られる。少なくとも年寄り相手にすることは思えない様々な暴力的な行為が行われたことは間違いない。そして……。

4

肥満した中年の婦人が、涙を堪えながら訴えている。

ペットの犬がいなくなったのだ。

椅子を挟んでその正面に香織は座っている。彼女としては最大限に寛容な態度で、つまりはただ黙って女の話の話を聞いていた。

それも限界だった。

「残念ですが、奥さん、私はペット探偵ではありません」

出来るだけ優しい口調で、香織はそう言った。

「報酬ははさみませぬ。あなたの名声を聞いてわざわざやってきたのよ。名探偵なんですってね」

「確かに私は名探偵よ」

誰も異論を唱えられないだろう断定ぶりだ。

「しかし、いいえ、だからこそ、仕事は選んでいるのです。私が解決するのは、私が私ゴス精神に則って、ゴスの美意識に叶うものだけ。そこにペットの捜索は」

「お嬢さま」

扉を開いて白髪の男が入ってきた。

「キク、勝手に入ってこないでと言ったでしょう」

「しかしお嬢さま」と深々と頭を下げている白髪の男こそは、平成の猟奇王村田喜久次郎その人だった。ただしその額から右目を断ち、鼻を縦断して反対側の顎にまで伸びる刀傷が、顔の印象を変えてはいた。

「お嬢さま、申し上げにくいことではありますが、探偵事務所は財政がピンチなので

「ごぎいますよ。確かにお父様に頼ればなんとかなるのかもしれませんが、お嬢さまはそれでもようごぎいますか？ ゴスの精神とは、父親に金の無心をするを許すのでしうか」

喜久次郎は香織の前にひざまずいた。

「よおくお考えください！」

「馬鹿者！」

香織は平手でその頬を打った。

「頭を下げる」

言われた喜久次郎は、抵抗なく額を床にこすりつけた。香織はその後頭部に足を乗せ、ぐいぐいと床へ押さえつけながら言った。

「パトロンを持ってこそ、真のゴス。放蕩者であってこそその趣味人なのよ」

「お言葉ですが、お嬢さま。確かに俗は配下に任せても、お嬢さま自身が俗世界にかかわつてはなりません。パトロンだの何だのと口にするこすら俗。すべてを私にお任せ下さい。既に俗にまみれたこの身、今更どのように汚れようと平気でごぎいます。どうかお嬢さま、このお仕事お引き受け下さいませ」

香織は喜久次郎の頭から足を退けた。

そして殊の外優しい声で言ったのだ。

「良く言った。おまえこそが真の忠信。さあ、顔を上げて」

「ありがとうごぎいます、お嬢さまああ！」

見上げたその顔は涙と涎でべしよべしよだ。

「でもね、残念ながら客はどこかへ行つたみたいよ」

喜久次郎が後ろを振り返ると、部屋からそつと逃げ出そうとしている女の後ろ姿が見えた。

「待て！」

怒鳴り、喜久次郎はその後を追つた。その後ろ姿に、香織は呼び掛けた。

「殺しちや駄目ですよ。一日人殺しは三人まで。もう昼までに三人殺しちゃったんですから。もう、ほんとにキクつたら」

ほほほほ、と香織のお嬢さま笑いが部屋の中に響き渡る、夏の気怠い午後の話であった。

### 第三話 忌まわしい愛了